

学び続ける生徒を育てる中学校授業の研究

—学習意欲を高める社会科指導を中心に—

教職実践基礎領域

渡部 紗千

1 はじめに

私は学び続ける生徒を育てたい。知識基盤社会の中で生きていくために必要な教育の目標は「学び続ける子」を育成することである。

中央教育審議会は、平成28年12月21日に答申を出し、次期学習指導要領に関して「2章 2030年の社会と子供たちの未来」の中で以下のように述べている。

新しい学習指導要領等は、2020年から、その10年後の2030年頃までの間、子供たちの学びを支える重要な役割を担うことになる。この2030年頃の社会の在り方を見据えながら、これから子供たちが活躍することとなる将来について見通した姿を考えていくことが重要となる。21世紀の社会は知識基盤社会であり、こうした社会認識は今後も継承されていくものであるが、近年、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて加速度的に進展するようになってきている。とりわけ第4次産業革命ともいわれる、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされている。社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となっており、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子供たちの生き方に影響するものとなっている。このような時代だからこそ、子供たちは、変化を前向きに受け止め、社会や人生を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしていくことが期待される。このために必要な力を成長の中で育てているのが、人間の学習である。子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である。

かつて1970年代の知識の量を重視する教育の頃とは変わり、知識基盤社会である現在においては、どのような仕事に従事することになっても、一人一人がそれぞれの環境でまわりの状況を見ながら、必要なことを見極め、そこにあるものを利用して努力し、教えられずとも育ち、成長していく、学び続け

る子を育成することが必要である。

故に、本研究では、「学び続ける子」を育成するための手立てを実証する。

2 主題設定の経緯

(1) 生徒の実態から

サポーター校の生徒から、社会科の授業が始まる前に、「過去のことを学んでどんな意味があるのか」と問われた。筆者は、「君みたいな人に歴史を好きになってもらいたいから、歴史を教えたいんだ」としか答えられなかった。サポーター実習で見ている中学一年生は、メモを取ったり教師の解説を聞いたりする力は高いが、教わった内容について積極的に新たな考えを持ったり複数の視点から考えたりする様子は見られない。生徒のレポート等でも、複数の視点からではなく、一つの方向からしか事象を見られない生徒が多い。サポーター校の先生方は、広い視野を持たせるための声かけや取り組みを行ってはいるが、生徒が自分のこととして捉えられていないため、効果がはっきりと出ていないように見える。

時代に応じて必要な能力が変化する知識基盤社会では、複数の視点から柔軟に対応し成長していける人材が必要になるため、生涯にわたって自分で自分を育てられる、学び続ける生徒を育成する必要がある。

(2) 今後の社会の方向性

筆者は中教審答申に述べられていた「2章 2030年の社会と子供たちの未来」に書かれていること以外にも、社会の変化を次のように感じている。

① 世界情勢の変化

わが国は先進国となり、他の国々を経済的に牽引する立場になった。一方で、国内企業は安い人権費と法人税を求め海外へ進出しつつあり、ものづくりは中国やベトナムなどの東南アジアへと移った。日本の労働人口も第二次産業から第三次産業へとシフトしている。グローバルな活動レベルが高くなれば、それだけ国内で新たな人材が必要になる。日本の企業が世界で活躍するためには、日本の中で何らかの付加価値を生み出し、日本の労働をより付加価値の高い労働にシフトしていく必要がある。研究開発、グローバルな戦略部門などにおける労働である。あらゆる分野で、こうした

内外の人材の活用に関するリアロケーション(再配置)が起きている(伊藤 2015)。

また、少子高齢化が進み、日本の人口構成の変化スピードは、世界屈指である。人口学では、65歳以上の高齢者率が人口全体の7%を超えると「高齢化社会」、14%超を「高齢社会」と呼ぶが、日本が高齢化社会になったのは1970年、高齢社会を迎えたのは1994年だ。たった24年しかかかっていない。先進国のほとんどは高齢者が増える傾向にあるが、その先頭を突き進んでいるのが日本である。2010年、日本の高齢者率は20%を超えており、早くも2024年には30%の大台に乗ると予測されている。人口推移のうち、経済・労働環境を考える上で特に問題になるのは、「生産年齢人口(15~64歳の人口)」である。15歳から64歳の生産年齢人口の減少は経済規模や労働市場の縮小に直結する(松谷 2004)。

② 情報社会の進歩

オックスフォード大学のカール・フレイとマイケル・オズボーンの両博士が2013年9月に発表した「雇用の未来：筆者たちの仕事はどこまでコンピュータに奪われるか？(The Future of Employment: How Susceptible are Jobs to Computerization?)」の中で、AIを搭載したロボットやコンピュータによって、今後10~20年の間に現在の職種が奪われる可能性が推定されている。これまで人間がしてきた仕事をこれからはロボットがすることによって、より効率的かつミスのない生産性の高い仕事がこの世に生み出されると述べている(Mukai 2015)。

これから生きる子どもたちは、今までのような考え方では仕事を失ってしまう可能性があり、人間だからこそできる仕事を自ら決めて将来の職業選択をしていく必要がある。

①②の点から、日本の社会の在り方は変化していくことが予想される。労働人口が減少していく中でも、科学技術の進歩を活用し、更なる進歩を希求しながら、新たな付加価値を付ける発想力を持ち、時代の流れに柔軟に対応できる労働が必要である。このことは、中教審答申の中で述べられている2030年を生きる子供像と合致しており、学び続ける人間の育成が今後の我が国の社会における大きな課題だと考える。

3 めざす生徒像

(1) 学び続ける生徒

学び続ける生徒を、社会の変化や時代の流れに合わせて、自らの目標を定め、その目標を達成するために必要な情報を取捨選択し、成長していくことができる生徒と規定する。

学校の中で見られる姿は、与えられた課題を実行するだけでなく、一つの事象に関して様々な視点から考え、自分の興味に合わせて疑問をもち、更なる学びを

得るために行動できる生徒である。

具体的には、授業中の発問や活動に対し意欲的に取り組み、積極的に問題を解決しようとし、友人や教師の疑問を自分のものとして考えられる生徒である。

(2) 学び続ける生徒を育てるために

学び続ける生徒を育てるためには、教師は習得→活用→探究の後に新たな疑問をもち、「新しいことをさらに習得したい」という気持ちへと繋がるように授業展開を工夫する学習過程を習慣づける必要がある。

学び続ける生徒が育つためには、「意欲」と「知識」の両面が必要であると筆者は考える。何事においても、「知識」がなければ理解は進まない。しかし、「意欲」がなければどれだけ丁寧にも他者が働きかけたとしても、学びは深まらない。故に、教師が伝えるべきは、確かな指導技術でもって「知識」を与えることと、「意欲」の出発地点となる動機付けを支援していくことである。

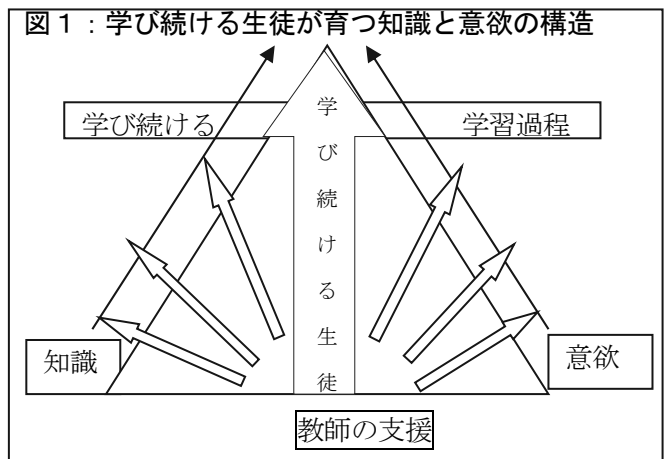
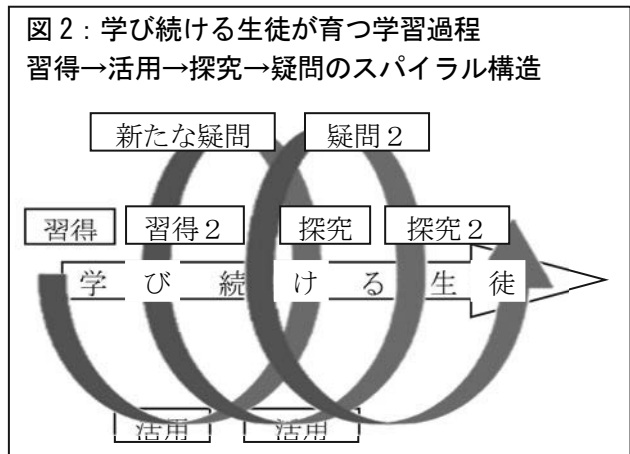


図1の左側の「知識」の軸がしっかりしていなければ、「意欲」はあるのに正しく学ぶことができないだろう。また、右側の「意欲」の軸がなければ、教師の言葉や工夫が届かず、聞いているだけで思考が働かず終わってしまうだろう。

「知識」を伝える際に大切なことが学び続ける学習過程の定着である。学習問題を解決して終わってしまうのではなく、問題解決した後に新たな疑問が生まれ、再び新たな疑問を解き明かしたいという気持ちにさせるようなスパイラルな学習過程を実践したい。



社会科の授業研究の第一人者のひとりである有田和正は人間の問う力、考える力は「はてな？」を起点にして生み出されるものであると述べている（有田 2009）。

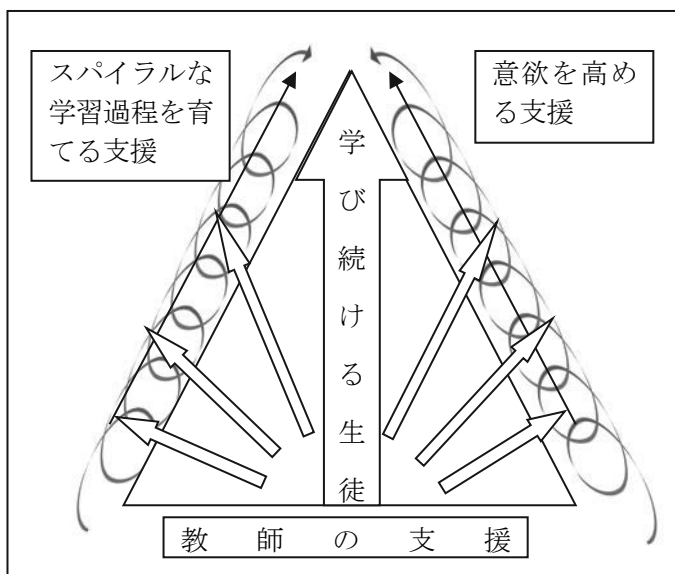
安井俊夫は、生徒から出た疑問を大切にしながら実践家で、教える単元の中にある重要要素を選び出し、単元を学んでいる間、一貫して深めることのできる「単元を通る学習問題」を選び出し、深めていく授業づくりを行っている。「単元を通る学習問題」とは、一つの単元を通して考え続けることができる学習問題である。例えば安井俊夫は、明治時代の授業を行う際に、『明治』の政策は『明るく治める政治』なのか『治まるめえ（治まるわけがない）』なのか」という学習問題を立て、明治時代の学習をする間ずっと、単元を通して考えさせている。1時間の授業にとどまらず、単元を通して考えさせることで生徒の思考はより深まっていく、と述べている（安井 2008）。

また、安井も「はてな？」を生み出すために、教師の深い教材研究による「子どもの興味を引き付ける工夫」と「問題解決的な学習」が実践されている。このことは有田の意見とよく似ていると考える。

中妻雅彦は、子どもの生活体験に結びつくことやものを教材として扱うことで、活動と子どもの距離を縮めることができると述べている。授業内容と子どもの生活を結びつけることで、子どもの発見や疑問が育ちやすくなる。中妻のスピーチ活動を軸にした実践の中では、スピーチ活動に関する指導と子どもの生活と結びつく体験を探してスピーチに対する意欲を高めている（中妻 2003）。

有田、安井、中妻の論から学び続ける生徒を育てるためには、生活に結びつくような動機付けと疑問が湧き出る授業であると考えた。そして、学び続ける学習過程の構築と、知識と意欲に対する教師の支援が大切であると考えた。それらのことを実践することによって学び続ける生徒が育つことを実証したい。

(3) 研究構想図



4 研究の仮説

学び続ける生徒を育成するには、
仮説① 教師が社会科に興味関心をもたせる工夫をすれば、社会科を学ぶ意欲が育ち、学び続けようとする生徒が育つだろう。

仮説② 知識と意欲を伸ばす学習過程を工夫すれば、学び続ける生徒が育つだろう。

そのために、以下の(1)(2)の手立てを取ることにした。

(1) 社会科の学習の切実性から興味関心を持ち、学び続ける意欲を育てる学習方法の工夫

生徒の中には、「社会科を学習する意味がわからない」という生徒もいる。まずは、社会科を学ぼうとする意欲を引き出すためのきっかけをつくるための工夫である。

① 劇化

教師が授業内容を語る際に、歴史上の登場人物やその時代に生きていた人々の気持ちをまじえながら台詞のように言ったり劇的に話したりすることで生徒の学習に対する意欲を高めたい。

② 視覚資料の活用

教師が授業内容を語る際に、言葉で話すだけでなく、話している内容を見える化し、何を話して言うのか視覚的に捉えさせることで、生徒の学習に対する意欲を高めたい。

③ ペア学習

一人で考えるだけでなく、自分の考えた意見を発表する場をつくることで、書くことの意味を見出させたい。本来はグループワークなどで全員の前で発表するのが良いが、必ず全員が短時間で発表できるのはペア学習なので、今実践ではペア学習を手立てとして加える。

④ ワークシートの工夫

ワークシートの中に社会科が苦手な生徒でもわかるような工夫を取り入れる。社会科が苦手な、料を見れば良いか載っていたり、語群の中から選ばなければならなかったりして、書けるように工夫した。「必ずできる」活動から入ることで、学習に対する意欲を高めたい。

⑤ 実物教材の利用

実物教材を使用することで、具体物を見たり触れたりすることができるので、生徒の学習意欲が高まる。

(2) 社会科に興味関心を持ち、学び続ける生徒を育てる学習過程をつくる工夫

手立て(1)で高まった意欲を学習内容そのものに対する興味関心へ繋げたい。発問を工夫し疑問をもたせ、習得→活用→探究→新たな疑問へと繋がる学習方法の工夫である。

① 発問の工夫

考えてみたいと思えるような発問を提示する。そうすることで、授業内容に対して、生徒の思考を働かせる。生徒が学習内容を自分のこととして捉えられるきっかけの一つとして、自分の生活と社会的事象が相互に関わり合っていることに気付くことが挙げられる。それまで他人事のように思っていたことが、実は自分たちの生活と密接に結びついていたら、自ずと興味関心は高まるのではないか。つまり、生徒たち自身にとって生活や将来に直結するような切実性のある問題を考えさせることが肝要なのである。教科書の内容をどう生徒の切実性と結びつけるのか。問題解決学習を行うにしても、学習問題をどう立てるのか。中学校社会科を、生徒の切実性と結びつけ、学習方法や学習内容を改善することで、生徒の学習への意欲を高め、中学校社会科をもっと意義あるものとするところではないかと考える。

② 社会科通信

社会科通信をつくることで、生徒の意欲を伸ばすきっかけをつくっていききたい。社会科通信とは、安井俊夫が実践で利用した手法である。安井は「歴史バンバン」という社会科通信を用いて生徒同士の意見を交流したり、資料を提示したりして、授業づくりを工夫している。自分の意見が共有されたり、仲間の意見を見る機会を増やしたりすることで学習を意欲的に取り組めるきっかけをつくりたい。また、自分の書いた意見が載っていたり、友達の意見が載っていたりすることを見ることで、学習に対する意欲を高めたい。また、疑問の共有や学びの共有ができ、学びたいという意欲が向上することを期待する。

③ ペア学習

(1)では意欲を高めるためのペア学習であったが、(2)の手立てとしても利用できる。話し合い活動を通して意見や疑問をもたせたい。

④ 単元を貫く学習問題

2章で触れた、安井俊夫の実践を参考に、単元を貫く学習問題を設定する。毎時間の学習問題と、単元を通して考えることができる学習問題を組み合わせることにより深い学びを得ることができると考える。

手立て(1)で生徒の意欲や切実性を高め学習内容との距離を縮める。手立て(2)で学習内容についてよりわかりやすく疑問につながるように工夫する。そして、生徒から疑問が湧き出る授業を創りたい。また、思考を深められる発問、意見を共有し、内省を促すための社会科通信を使用し、生徒の切実性に基づく社会科授業を創っていききたい。

手立て(1)と(2)には共通する部分があり、手立てによっては(1)と(2)の両方の効果があるものがある。明確に分けることはできないが、本稿では上記のような分け方をしていく。

5 研究の内容

(1) 教師力向上実習 I

歴史分野「第2章 原始・古代の日本と世界 第1節 人類の出現と文明のおこり」

① 単元について

本単元は、学習指導要領【歴史的分野】の内容(2)「古代までの日本」における(ア)「世界の古代文明や宗教のおこり、日本列島における農耕の広まりと生活の変化や当時の人々の信仰、大和朝廷による統一と東アジアとのかかわりなどを通して、世界の各地で文明が築かれ、東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを理解させる」の内容に位置づけられている。

本単元は、人類の出現および進化の過程と約1万年前から6世紀までのわが国の成立過程を、大陸との交流に着目させながらとらえることをねらいとしている。約7000年前にアフリカで誕生した人類は進化を継続し、生活する場を世界中につくった。地球が氷河期を終えると人類は世界の各地で文明を起し、国家の骨組みを形成していった。また、大陸との交流も行われており国家の基礎ができていった時期である。このように本単元で学習する内容は、わが国の古代から今に続く文化について理解させるとともに、今後の歴史的分野の学習に興味・関心をもたせる上で意義があるといえる。

本単元では、わが国の古代から今に続く文化について理解させるとともに、今後の歴史的分野の学習に興味・関心をもたせるために、当時の人類はどのような暮らしをしていたのか教え、当時の人々の生活を劇化や視覚資料を用いて切実に感じさせる。また、「それぞれ別の地域で起きた文明の共通点は何か」という単元を貫く学習問題を立てて、人類の文明のおこりの共通点を見出し、「地域が違うのに同じように発展していくのはなぜだろう？」という新たな疑問に気付かせ、いつの時代も変わらない人間の考え方の面白さに気付かせたい。

② 単元の指導の流れ(4時間完了)

指導過程	評価計画	手立て
直立二足歩行や共同生活が果たした役割について考える。(1/4)	暮らしを豊かにするための工夫について多角的に考察している。(プリント)	(2)-⑤ 単元を貫く学習問題 「それぞれ別の地域で起きた文明の共通点は何か」 (2)-① 発問 「ヒトはどこから？」 (2)-① 発問 「なぜサルは進化しなければならなかったのか？」 (1)-② 視覚資料

		サルからヒトへの進化の過程を視覚的にわかるように工夫した。 (1) -① 劇化 サルからヒトへの進化の過程を劇化する。教師が気候の変化に伴い、サルが進化せざるを得なかった理由を劇で表現した。発言力のある生徒に協力してもらうことで、他の生徒を引き付けた。
エジプト文明とメソポタミア文明の特色が発達した理由について考える。(2/4)	エジプト文明やメソポタミア文明の発展の過程で、文字・暦・数学などが発達した理由について考察している。(プリント)	(2) -②社会科通信 前時の復習を、社会科通信を使って行った。生徒の意見や本事で使用する資料も載せることで、生徒の興味関心を高めた。(資料①) (1) -② 視覚資料 太陰暦を示すために、理科室前の廊下に貼ってあった月の満ち欠けを表した図を使用し、生徒と教材の切実感を演出した。
世界各地でおこった古代文明を比べて共通する特色に気づく。(3/4)	世界各地でおこった古代文明を比べ、共通する特色に気づいている。(プリント)	(1) -④ ワークシート 語群形式にすることで、社会科が苦手な生徒でも活動しやすくなるように工夫した。 (2) -③ ペア学習 これまでに学んできた文明の共通点を探る際に、一人で見つけたことを共有することで探究心を高めた。
中国で統一国家が成立した後、ローマ帝国との交通路が開かれたことや、朝鮮半島の国々の動きに日本との繋がりに気づく。(4/4)	中国とローマ帝国との交流の様子や、中国、朝鮮半島の国々やヨーロッパの動きについて、地図や写真から読み取って整理している。(発言・プリント)	(1) -③ ペア学習 通貨や量の単位が共通していなかった秦以前の中国を体験させるために、量や単位がバラバラに記された紙を配布し、単位や量の基準を作った秦の偉業を体感させた。 (1) -① 劇化 解説する際に日本と中国の文明の差を知ってもらうために縄文時代の日本人の様子を台詞にして表現した。

③ 成果と課題

4時間分の授業を2クラスで実施した。今回の実習は手立て(1)・①の劇化が大きな意味をもつと感じた。ワークシートの記述内容にも、劇で表現した部分に関する記述が多くみられたし、劇を見ている時の生徒の様子は、顔があがっており、集中できているようだった。普段は授業に取り組むことができない生徒Aも、劇に興味を示し、集中して授業に参加することができた。表現力と劇的に語る力が求められるので、もっと振り切って劇に入り込むことができれば、より高い教育効果が得られたが、劇を見ている時の生徒の様子は顔が前を向いており、集中していたと参観した中妻教授に指摘された。

1時間の授業で必ず生徒が活動する時間をつくるようにしたことも良かった。ペア学習を授業の中に取り入れたことで、必ず全員が発言をする場面ができる。発言している様子から発表させる生徒を決めることもできた。「いいこと言ってたからみんなに言ってみて」と声を掛けることができた。どうしても、全体を見ることができず、良い意見を言っていた生徒を授業中に見つけることができず、参観して下さった先生に教えていただくことがあったので、全体を見られるように机間指導できるようになりたい。

思考を深められる発問が弱かったことと、単元を貫く学習問題を生徒に意識させることができなかったため、今後の課題にしていきたい。



【写真1 劇を見る生徒】

(2) 教師力向上実習Ⅱ

歴史分野「第3章 中世の日本と世界 1 世界の動きと武家政治の始まり」

① 単元について

本単元は、学習指導要領【歴史的分野】の内(3)「中世の日本」における(ア)「鎌倉幕府の成立、南北朝の争乱と室町幕府、東アジアの国際関係、応仁の乱後の社会的な変動などを通して、武家政治の特色を考えさせ、武士が台頭して武家政治が成立し、その支配が次第に全国に広がるとともに、東アジア世界との密接なかかわりが見られたことを理解させる。」及び(イ)

「農業など諸産業の発達、畿内を中心とした都市や農村における自治的な仕組みの成立、禅宗の文化的な影響などを通して、武家政治の展開や民衆の成長を背景とした社会や文化が生まれたことを理解させる。」に位置づけられている。

本単元は、平安時代に行われた貴族中心の政治から、江戸時代まで約650年続く武家政治への転換期となる鎌倉時代について学習する。墾田永年筆者財法ができ、荘園や豪族の力が強くなり、朝廷の力が弱まっていった平安時代末期、農民の中から武士が現れ、武士団を形成していく。武士団は次第に大きくなり、源氏と平氏が台頭していく。平治の乱を機に平清盛は太政大臣になり、武士でありながら貴族政治の要職を手に入れ、政治を行うが、源氏によって倒される。源頼朝は征夷大将軍となり鎌倉幕府を開く。守護や地頭など貴族政治とは異なる、封建制度で結ばれた武士による新しい政治制度が作られる。13世紀になると、承久の乱を機に朝廷をも抑え、支配領域を拡大し、御成敗式目で武家政治の基礎ができる。また、平清盛の日宋貿易により、大陸との結びつきが強まり、新しい仏教や宋銭が日本に入ってくる。

このように本単元で学習する内容は、貴族政治から武家政治への転換期として理解させるとともに、これ以降の政治の中心となる武家政治に興味・関心をもたせる上で意義があるといえる。

本単元では、「政治の中心が移り変わっていくことで、どのような影響があるか」という単元を貫く学習問題を立てて実践する。貴族の世の中が武士の世の中へ変わっていくことの歴史的意義を伝えるために、劇的に語りたい。また、「一所懸命」など現代にも残る熟語や逸話を紹介することで、現代との繋がりや当時の人々の混乱を伝えたい。政治の中心者が移り変わっていく中で、源頼朝が弟である義経をも手にかけてきたことから「なぜ家族と戦ってまでも政治の中心を手に入れたのか」という新たな疑問に気付かせ、いつの時代にも頂点を取りたがる人間の面白さに気付かせたい。

② 単元の指導の流れ (5時間完了)

指導過程	評価計画	手立て
武士がおこった背景や、武士団として勢力を伸ばしていた経緯を資料から読み取ることができる。	「白河上皇の警護をする武官」の絵や平時物語絵巻を活用し、武士が勢力を伸ばしていた理由について資料を元に理解で	(2)-⑤ 単元を貫く学習問題 「政治の中心が移り変わっていくことで、どのような影響があるか」 (1)-② 視覚資料 藤原氏と天皇家の対立構造を赤と青の台紙に貼り付けることによって見やすくした。 教科書に載っている平治物

(1/5)	きる。(プリント)	語の拡大を黒板に掲示した。 (1)-① 劇化 農民が武器を取り、貴族をも攻撃しうる力をもった事実を劇的に表現した。
源平の争いから鎌倉幕府の成立までの経緯、守護や地頭の権限について理解する。 (2/5)	源平の争いから鎌倉幕府の成立までの経緯、守護や地頭の権限、封建制度のしくみについて理解している。(プリント)	(1)-① 劇化 源平の争いから現代まで残る逸話を語った。 視覚資料を用意した。 (1)-② 視覚資料 視覚資料を多用し、語っている内容を目で見えてわかるようにした。 鎌倉時代の仕事を見やすく黒板に掲示した。
承久の乱で御家人たちが幕府側に結集した理由について考える。承久の乱ののち、武家政治が安定していったことを理解する。 (3/5)	承久の乱で御家人たちが幕府側に結集した理由について、考察している。承久の乱ののち、武家政治が安定していったことを理解している。(発言・プリント)	(1)-② 視覚資料 登場人物の絵や像を掲示することでイメージをもちやすくした。 (2)-③ ペア学習 自分の書いた意見をペアで共有し、抽出した生徒に全体で発表させた。 (1)-① 劇化 栄華をふるった政治の中心者たちが次々と代わっていくことを語った。
農業生産や商業の発達にともない民衆の力が伸びていったことや、新しい文化が生まれたことを理解する。 (4/5)	農業生産や商業の発達にともない民衆の力が伸びていったことや新しい文化が生まれたことを理解している。(発言・プリント)	(1)-① 劇化 宗教の覚え方をゲームで教えた。 (1)-⑤ 実物教材 平家物語のCDを聞かせた。 (1)-② 視覚教材 平安文化と鎌倉文化の代表的な仏像を比較させ、気付いたことを共有することで、鎌倉文化の特徴に気付かせた。 (2)-③ ペア学習 気付いたことをペアで共有することで、新たな視点を取り入れられるようにした。

<p>13世紀ごろの世界の様子に目を向け、東西の貿易や文化交流が盛んになったことに気づく。 (5/5)</p>	<p>13世紀ごろの世界の様子に関心を高め、日本にもたらされた文化や、モンゴル帝国の広がりや東西交流の様子について意欲的に調べようとしている。(発言・プリント)</p>	<p>(1)-⑤ 実物教材 日本の扇子とヨーロッパの扇子を見せて、モンゴル帝国を通して伝播していったことを教えた。 (1)-② 視覚資料 モンゴル帝国の広さを視覚的に理解させるために、世界地図にモンゴル帝国の形をした紙を貼り、日本や世界と比較させることでわかりやすくした。 (2)-① 発問 「鎌倉時代を漢字で表すと?」 「変」「武」など特徴を捉えた漢字で表現することができた。 (2)-② 社会科通信 社会科通信で意見を共有した。(資料②)</p>
---	--	---

③ 成果と課題

教科書に載っている平治物語絵巻を拡大したものを用意することで、どこに何があるか示しやすくした。生徒に見つけたことを発表させるときにわかりやすくなった。語るだけの授業よりも視覚資料などを示しながら話すことで、生徒の顔が前を向き、関心が高まっているのを感じた。言葉だけの語りを聞くだけでなく、何かしらの活動があった方が生徒は長く集中をされているのだと思った。

朝の会で毎日ペア学習をしている学級だったので、ペア学習はうまく取り入れながら実践できた。日頃から行っている活動と連動させながら授業を組み立てることで教育効果が高まるのだと実感した。

どうしても、全体を見ることができず、良い意見が出ていたことを後から参観してくださった先生から教えてもらった。ペア学習をさせると、全体を見ながら机間指導をしにくくなるので、プリントに話し合ったことを記述させて評価するなど、今後の課題にするとともに、工夫していきたい。

6 実践の考察

(1) 手立て(1)「社会科の学習の切実性から興味関心をもち、学び続ける意欲を育てる学習方法の工夫」についての考察

① 劇化について

劇を見ているときの生徒は、顔が前を向いていて、楽しそうな生徒が多かった。人類の進化の過程を表したとき、協力して大きな獲物を倒すために「言語」が必要不可欠であったことを考えさせるために、数名の

生徒に協力してもらって劇を作り上げた。参加することによって更に面白さが高まった。劇の印象が強く残り、いつもは授業に積極的に取り組むことができず、何も書けなかったり眠ってしまったことがある生徒Aも、劇で見たことに関してはしっかりと記述ができていた。劇化した部分に関しては、興味関心をもたせ、社会科に対する意欲を高めることができた。

② 視覚化

口で言うだけでなく、視覚化するために、多くの資料を作成した。人物が出てくる際は、肖像画や銅像の写真を見せることで印象づけた。また、平治の乱の対立構造を明確にするために、色分けをした。政治の中心の移り変わりを表すために、「笑顔」と「泣き顔」を描いたカードを貼った。些細なものであっても、作れる資料はすべて手作することを心掛けた。言葉だけで語るよりも生徒の顔が上がり、興味関心を高めることができた。

課題としては、プリントの穴埋めをする時にも、黒板に記述するだけでなく、カードを裏返すことでクイズ番組のような楽しさを演出した。資料集の年表から探しやすくなり、何を書けば良いのかわからない生徒は少なくなり、社会科が苦手な生徒も活動に参加することができた。板書に動きも出たが、見にくくなってしまったので、今後は、より見やすくなるように工夫していきたい。



←源頼朝(左)と源義経(右)の人物カード

【写真2 人物カード】

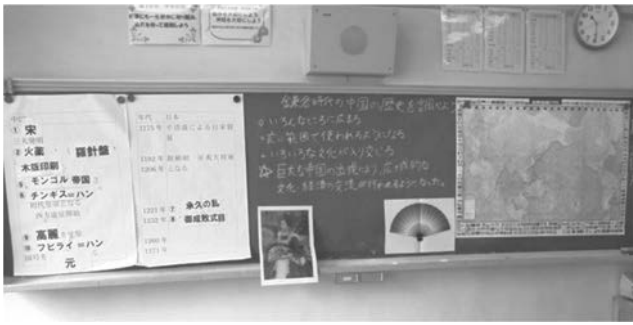


赤(左)は平治の乱で勝利した平氏と上皇

右(青)は平治の乱で敗北した源氏

権力を握った勢力を「笑顔」で示した

【写真3 色分けで示す対立構造】



【写真4 視覚資料を使った板書】

③ ペア学習

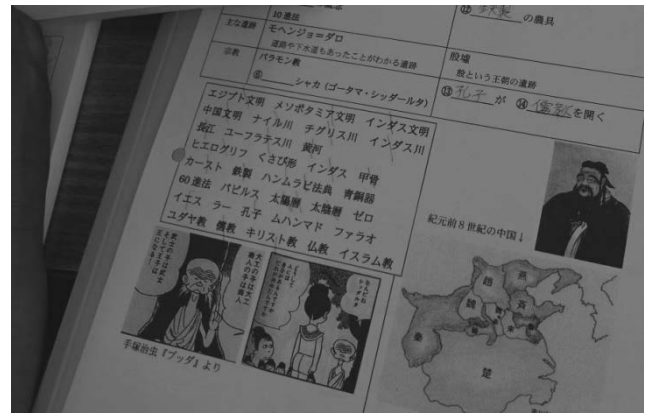
ペア学習を必ず入れて授業を行った。実習校の1年生は、朝の会で必ずペアになって話す活動を行っているので、慣れ親しんだ活動の延長線上として、自然に活動することができていた。ペアで話すことで、必ず全員が発言をする機会が得られた。また、机間指導で良い意見を言い合っているペアを見つけておいて、発表してもらうこともできた。一度ペアの相手に発表している内容なので、全体の前で発表する際にも緊張することなく、安心して発表することができた。「さっき言ったことを言えばいいよ」と声をかけることで、発表への意欲を高めた。



【写真5 ペア学習をする生徒】

④ ワークシートの工夫

社会科が苦手な生徒でもできるように、語群から抜き出して書かせる工夫をした。「この中から選んでみて」と言うことで、社会科が苦手な生徒も取り組むことができ、活動に対する興味関心を高めた。また、語群から抜き出し終わった生徒には、「エジプト文明の言葉に赤で丸をつける」などの指示を出すことで、様々なレベルの課題を出し、社会科が苦手な生徒にも得意な生徒にも対応することができ、社会科の活動への意欲を高めることができた。



【写真6 語群や漫画をいれたワークシート】

⑤ 実物教材の利用

平家物語の琵琶法師の語りのCDを聞かせたり、日本から元を通してヨーロッパに伝わった扇子を持参したりすることで、生徒の興味関心を高めた。日本からのものを示すことで、「扇子が日本から世界にいったことは知らなかった」と記述した生徒も多く、日本と世界の意外なつながりを実感させることで、興味関心を高めることができた。

また、実物教材を使った後の放課に「もう少しよく見たい」と話しかけてくる生徒がいた。

(2) 手立て(2)「社会科に興味関心をもち、学び続ける生徒を育てる学習過程をつくる工夫」についての考察

① 発問の工夫

「ヒトはどこから？」など考えやすいように、短くわかりやすくなるよう工夫した。考える材料になるような資料を提示しながら行った。発問を工夫することで、社会科の内容への興味関心を高め、習得や活用を促すことができた。

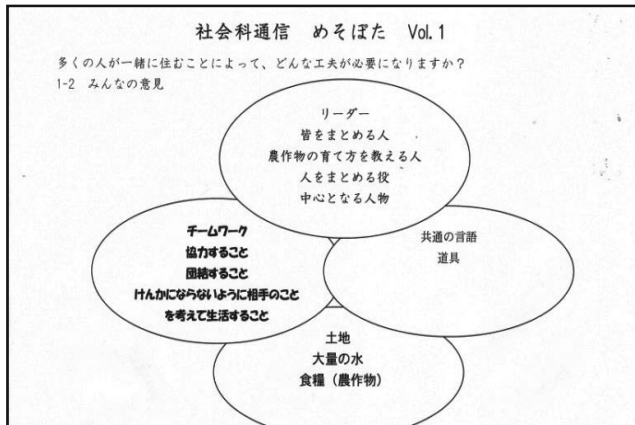
初めは、別の言葉に言い換えてしまったこともあったが、回数を重ねるにつれて、うまく言えるようになった。主発問へ繋げる小発問がなかなか思い浮かばず苦労したので、経験を積んで、面白いと思わせることができる発問を考えられる発想力を身に付けていきたい。



【写真7 プリントに丸を付けて表現する】

② 社会科通信

社会科通信を出したことで、他の生徒の意見を交流の素地をつくった。自分の意見が載っていることを確認するために、熱心に読んでいた。自分の意見を探すだけでなく、他の生徒の意見を読んで、新たな疑問につなげられるように、社会科通信を工夫していきたい。また生徒の意見を取り入れた通信は、これからもたくさん出していきたい。



【資料① 社会科通信①】

社会科通信 鎌倉時代を一言で表すと…？

先週の授業の中で、皆さんに鎌倉時代を一言で表してもらいました。素敵な一言を書いてくれたので、紹介していきます。

武

- 武士の力が強まると同時に、武士を中心とした文化が反映された時代だから。
- 武士が封建制度を始めたことで、政治が大きく変わったから。
- 武士中心の世の中だったし、武士の力が強い時代だったから。
- 武士の力強さを感じたから。

権

- 強いと思ったから。
- 権力争いが激しかったから。
- 権力をもっている人がどんどん変わっていったから。
- 天下の奪い合いが多かったから。

乱

- 乱や戦いがたくさんあって世の中が乱れていたから。
- たくさんの変化が起きたから。乱世の「乱」。
- いろいろな争いがあったから。
- 戦いも政治も全て力で決まっていた、戦いが多い時代だと思ったから。
- 武士が暴れた時代だから。
- 不安定だから。

変

- 政権がたくさん変わったから。
- 文化や政治の変わり目だと思ったから。
- 今までにない新しい文化や仏教ができたから。

一喜一憂

- 平氏は栄華を誇り、滅亡した。時代の変化が激しい時代だったから。

強

力

新

全ては載せられませんが、この他にも素敵な意見がたくさんありました。時代の中心を捉えられた様々な意見があって素晴らしいと思いました。
私は「始」という漢字を選びました。これからおよそ600年以上続く、武家政治の始まりの時代だからです。

【資料② 社会科通信②】

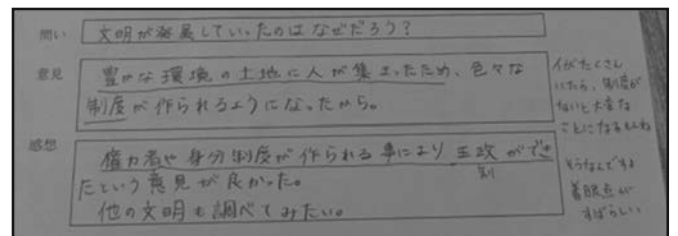


【写真8 社会科通信を読む生徒】

③ ペア学習

秦が中国を統一したことを伝えるために、あえて単位を揃っていない貿易カードを渡し、単位が異なるとうまく貿易ができないことを体感的に理解させることができた。また、一人で調べたことや一人で気づいた疑問を共有することで、一人では気付けなかった新たな疑問ももつことができた。

資料③では、「権力者や身分制度が作られたことにより王政ができたという意見が良かった。」とペア学習で学んだ他の生徒の意見に学びの深まりを感じている。また、「他の文明も調べてみたい」という新たな疑問も生まれている。



【資料③ 生徒の記述】

④ 単元を貫く学習問題

単元を貫く学習問題を筆者が意識して実践することができた。しかし、生徒にも意識させることができなかった。教師が意識をしておくことだけでなく、生徒にも意識をさせるために、単元を通して問い続ければより高い教育効果があっただろう。

(3) 結論

鎌倉時代では、「鎌倉時代の逸話や教師の話を聴いて、面白いと思ったことや学んだことをペアで話してみよう」という手立て(1)-①と(2)-③を関わらせた課題を出したところ、興味深い感想や新たな疑問について書かれた記述が多くみられた。

「なぜ平氏は源氏の軍勢を押し返せなかったのか」

「紅白戦の起源が源平合戦なら、強いのは源氏の色で

ある白なのではないか」

「壇ノ浦の合戦で安徳天皇が船に乗っていたのはなぜか」

「義経が平氏を滅亡させたのはすごいけど、壇ノ浦の戦いで本当に船を跳んだのかなあと思う」

「義経とフビライハンがやったことは似ている」

「人はなぜそんなに天下を取りたがるのか」

社会科が苦手な生徒Aも「義経が馬でがけを降りたところが面白かった」と記述している。

手立て（1）や手立て（2）を組み合わせながら授業を実践することで、生徒の新たな疑問が生まれやすくなることがわかった。劇化や視覚資料を用いて生徒の興味関心を高め、発問や社会科通信で更なる工夫をすることで、新たな疑問を生み出すことはできたといえる。

今後の課題として、見つけることができた新たな疑問を「自分の力で調べたい」、「考えたい」という気持ちを、実際に調べさせ、考えさせるための工夫が必要であると感じた。新たな疑問を再び習得し学ぼうという意欲まで繋げなければ、新たな疑問は解決されることなく終わってしまう。プリントに記述された新たな疑問には朱書きで、面白い視点であることを褒め、調べてみてはどうか、と書いたが、それだけで実際に調べてくれる生徒は少ないであろう。今後は、新たな疑問を解決するところまで、見届けて社会科通信などで生徒の学び続けようとした姿を認めていきたい。

7 おわりに

今回の実習で教師が意欲を高める工夫や新たな疑問を生み出す工夫をすれば、生徒は応えてくれると実感した。新たな疑問を見出した生徒をスパイラル構造の次なる習得に結びつけるためには、授業時間内に留まらない継続した支援が必要になる。授業時間内に解決しなかった自分の新たな疑問を解決するのは、生徒自身なのである。生徒が学び続けようと思うきっかけとなるために、どうしたら良いのだろう。筆者は、教師自身が学び続ける姿勢を見せることであると考えている。教師という立場であっても、教科に対して、指導法に対して、学べば学ぶほど新たな疑問は尽きない。その疑問の解決方法を模索し、習得し、活用し、そしてまた新たな疑問へ繋げたい。その姿勢を隠すことなく生徒に示しながら、共に学び続けていきたい。

【参考文献】

- 無着成恭編『山びこ学校(新版・定本)』(百合出版 1956)
無着成恭編『続・山びこ学校』(むぎ書房 1970)
中妻雅彦『スピーチ活動でどの子ものびる—クラスの人間関係が変わる、学級の基礎が育つ—』(ふきのとう書房 2003)
松谷明彦『「人口減少経済」の新しい公式』(中公新書 2004)
二谷貞夫・和井田清司編『中等社会科の理論と実践』(学文社 2007)
安井俊夫『子どもの目で学ぶ近現代史』(地歴社 2008)
有田和正『教え上手 “自ら伸びる”人を育てる』(サンマーク出版 2009)
石井建夫『石井建夫著作集 はてなの社会科 再び “夢と生气”を語る社会を』(国土社 2011)
加藤好一『中学歴史の授業』(民衆社 2012)
溜池善裕「山びこ学校」(『新版社会科教育辞典』p66-p67 ぎょうせい 2012)
三上真葵・中妻雅彦『『共感・共同』論に基づいた授業実践の意義—子どもの主体的な追求の条件は何か—』(愛知教育大学教育創造開発機構紀要第2号 2012)
加藤好一『中学地理の授業』(民衆社 2014)
- 伊藤元重「企業の海外展開が増えると日本が空洞化するという勘違い」(<http://diamond.jp/articles/-/25167>、2016/12/26 閲覧)
Ryota Mukai「人工知能の発達によって将来なくなる仕事・なくなる仕事」2015年6月 閲覧
<http://www.co-media.jp/article/11088>
中央教育審議会答申 2016/12/26 閲覧

付記

長期間に渡りお世話をしてくださった実習校の先生方、丁寧に指導してくださった中妻先生、本当にありがとうございました。

来春から名古屋市の教師として勤務します。学び続ける子供を育て、自身も学び続ける教員であり続けられるよう邁進する所存です。